

瀬戸陶磁器産地の概況と問題点

Economic Reality and Problems of Ceramic Industries in Seto, a Local Traditional Industry District.

井上 博進*₁

Hironobu Inoue

寺部 改*₂

Tadasi Terabe

Based on traditional technology, regionally available raw materials and local capital, varieties of local traditional industries or "Jibasangyo" have grown across the nation.

Many of these local traditional small & medium industries form "clustered"-type industrial districts and have contributed to economic development of the region.

"Jibasangyo," however, are currently facing difficult times, due to the prolonged business stagnation after the bursting of the "bubble economy", and the weakened competitiveness of exports as a result of the high appreciation of the yen and surge of imported goods from abroad. Seto is a typical example of these now stagnant "Jibasangyo" districts. It is necessary to analyze the economic reality of the district and to pinpoint the problems in order to find the solution.

The ceramic industry of Seto has its origin in the thirteenth century, is one of the oldest in Japan, and the term "Setomono" (meaning Seto ware) has been virtually synonymous with chinaware in Japan.

Ceramic products in Seto cover a wide range of commodities for both domestic and export markets, from home-use tableware, dolls or ornaments to industrial-use materials such as tiles, insulators, "new ceramic" electromagnetic products, etc.

Thus, Seto can be called an all-round manufacturing complex for ceramic materials.

After 1985, when the Japanese yen appreciated so much, business firms in Seto suffered a fatal blow, since export products such as tablewares and ornaments had accounted for more than 50% of the total output of Seto ceramic industries.

Except for some of the advanced "new ceramic" products businesses, ceramic products manufacturers in general are in serious trouble now.

This dissertation presents a detailed picture of the existing economic situation of recent Seto businesses and its problems.

1. はじめに

私共は、愛知工業大学'研究報告' No 31 (1996) で地場産業の活性化について、繊維及び陶磁器の代表的産地である尾西毛織物産地と瀬戸陶磁器産地を比較しながら論じた。今回は、このうち長い歴史を有し、特に明治以降多くの製品分野を開拓して発展してきたが、1985年のG5による急激な円高により、ノベルティ、ディナーウェアといった輸出向製品に特化していたため、大きな打撃を受けた瀬戸陶磁器産地について深く掘り下げて検討を加えた。

2. 陶磁器産業の歴史

瀬戸地域の陶磁器産業の歴史はわが国の陶磁器産地のなかでも古く、平安時代までさかのぼるといわれている。その後、鎌倉時代に陶祖加藤四郎左衛門景正が宋から技術を持ち帰ったことにより、瀬戸地域一帯に豊富に埋蔵されている良質な原料を活かして陶器の生産が盛んに行われるようになった。

鎌倉・室町時代の代表的な産地は六古窯といわれ、瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前であった。この中で、瀬戸だけが施釉陶器を生産し、他の産地は無釉の陶器であった。これらの無釉陶器は茶器や茶壺、種壺、水壺、酒瓶、すり鉢など日用雑器として、近代に至るまで広く使用されてきた。

安土桃山時代、有田で磁器の生産が始められると、陶器より堅くてなめらかで、肌が白く美しく割れに

* 1 愛知工業大学 経営工学科

* 2 愛知工業大学 経営工学科

く、などの優れた点をもつ磁器が好まれるようになり、江戸時代に入ると、瀬戸の陶器は有田の磁器にそのシェアを奪われ、陶磁器生産の中心地は有田へと移ることになった。

江戸時代後期、瀬戸の陶工加藤民吉が磁器の製造技術を修得し、瀬戸に伝えた。これによって瀬戸は、再び陶磁器の大生産地として栄えることとなった。しかし、本格的な近代産業となるのは明治以降であり、欧米の近代技術の導入によって、陶磁器産業も多方面にわたって近代化が進められて来たのである。

①明治以降

瀬戸地域における明治以降の成長発展について簡単にみてみると、

(1) 明治初期の瀬戸の主たる製品である飲食器類の市場は、東日本の都市部に限定されていたが、その後国内商品流通の拡大・交通網の整備にともない山間部・日本海沿岸地方にまで拡大し、瀬戸の飲食器類の生産は拡大していった。(地場産業の量的発展)

(2) 明治後半になると焼成と製土と成形とが分業化されるようになり、これが瀬戸地域の陶磁器生産力を大きくした。その後、白素地、絵付などの専門分野の工場ができ、分業がいつそう進展した。(地場産業の分業体制の確立)

(3) また、そのころ石膏型による⁴ 鑄込成形法が導入され、動力ろくろも実用化されるなど量産体制が整いはじめ、設備の面からも生産力が増大した。(地場産業の技術的発展)

(4) さらに明治期には輸出向け洋飲食器、国内向け電磁器、大正期には輸出向け玩具・置物、国内向けタイル、工業用理化学用品の生産がそれぞれ開始され、瀬戸の生産する陶磁器生産は多様化していった。(地場産業製品の多様化)

(5) このような瀬戸陶磁器産業の量的・質的発展は各種陶磁器製造業者に主原料・副資材を供給する採掘・製土・釉薬製造など多様な関連産業の独立・分化を進め、地場産業の多面的展開を促進することになった。(関連産業の発展)

(6) しかも、瀬戸の電磁器製造業者向けに取付金具等を生産する螺子・電気金具業者は、その後自動車・弱電など他産業向けにも各種部品を供給する専門業者へと発展していった。また、瀬戸の陶磁器製造業者に窯業機械を供給・修理していた業者も、その製品を全国的に販売する窯業機械メーカーへと脱皮していった。(地域産業の地場産業化)

(7) また、ことに高度成長期以降電気・電子工業の発展に伴い、瀬戸産地においてもファインセラミックス分野や電気部品分野に進出する企業が出現し、新技術の開発・新分野の開拓に取り組んでいる。一方、公害問題が顕在化するにつれて、窯業機械メーカー・陶磁器製造業者の中から脱水装置・塵分焼却炉など公害防止機器を製造販売する企業が出現している。(地場産業の多面的発展)

(8) これ以外に、瀬戸陶磁器産業の発展とともに国内向け、輸出向け流通を取扱う産地問屋・輸出業者及びガラス・鋳物砂用原料である珪砂の採掘・精製業者も成立発展していることを見逃してはならない。(地場産業の成立・発展)

つまり、瀬戸では地場産業である陶磁器産業が地域の基幹的産業として、地域経済の持続的成長・発展を実現し、各種の地域産業は副次的産業として、地場産業の動きに対応して受動的に発展するという地域経済のメカニズムが作用してきたのである。

3. 地域経済に占める地位

1995年における瀬戸市の商工業の構造をみたのが次ページの表1及び表2である。

表1 瀬戸市の工業構造 - 1995年 - 単位 億円

	工場数	比率	従業者数	比率	出荷額	比率	付加価値額	比率
総数	982	100.0	15484	100.0	3693	100.0	1853	100.0
窯業・土石製品	596	60.7	6744	43.6	909	24.6	481	26.0
電気機器	65	6.6	2076	13.4	1067	28.9	557	30.6
金属製品	66	6.7	1419	9.2	532	14.4	241	13.0
機械器具	66	6.7	1271	8.2	251	6.8	127	6.9
紙同製品	34	3.5	411	2.7	77	2.1	29	1.6
その他	39	4.0	3563	23.0	857	23.2	418	22.6

注1 瀬戸市工業統計調査結果速報

注2 その他には輸送用機器、化学工業及びプラスチック製品製造業を含む

これによると、工業部門では窯業土石製品が工場数の60.7%、従業者数の43.6%と当地域において圧倒的存在感を示している。出荷額では24.6%とそのシェアは縮小するものの未だ瀬戸市工業の生産額の1/4を占め、雇用吸収力をはじめ地域経済を支える最大の産業であることに変わりはない。

表2 瀬戸市の卸売業 - 1994年 - 単位 億円

	商店数	販売額
一般卸売業	456.0	1248.9
内陶磁器卸	200.0	323.0
内割合	43.9	25.9

注1 瀬戸市商業統計調査

注2 陶磁器卸にはガラス卸を含む

1994年瀬戸市における卸売部門をみると、卸売業456件中陶磁器卸が200件と卸売業に占める割合が商店数で43.9%、販売額では1248億円中323億円と25.9%を占め、他の地域にない特色を示している。このように瀬戸市にとって地場産業である陶磁器産業の占める割合は非常に大きい。しかも、地場産業産地に多くみられるように社会的分業が発展していることもあって、陶磁器・同関連製品製造業者のほかに陶磁器製品の梱包資材を供給する紙製品製造業など各種関連産業をはじめ、製造業以外でも、焼成用燃料販売業や運送業など陶磁器産業と直接・間接に結びつく諸産業を考慮に入れると、瀬戸市における広義の陶磁器産業の占める地位は極めて大きいといえる。

4. 産地の最近の動向

(1) 生産額の推移

瀬戸産地の陶磁器メーカーで構成する愛知県陶磁器工業協同組合組合員の生産額を、生産のピークを示した1984年から昨1995年までの推移をみると表3及び図1のとおりである。1985年の急激な円高による輸出不振によって86年、87年は大きく生産額を低下させた。しかし、88年以降国内景気の回復と共に生産額を回復したものの84年の域までは達せず、再び91年以降年々生産額を減少している。95年の生産額は84年の61.6%に過ぎず、瀬戸産地の低迷は厳しいものがある。

これを国内と輸出についてみると、国内向けは、85年に瞬間的に若干落ち込んだものの以降年々増加し、91年にはパプルの好景気もあって84年の131.9%まで伸びた。しかし、それ以降はパプルの崩壊と共に年々販売額は落ち込んでいる。

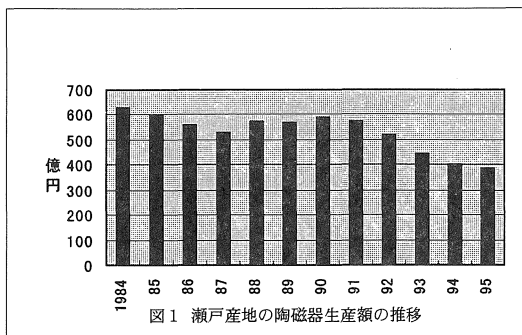
一方、輸出向けをみると輸出の多かったのは77年の350億円、80年の342億円であるが、輸出比率はそれぞれ77年が62.3%、80年が55.6%と生産の60%近くを輸出する輸出型産地であった。84年でも輸出は273億円、輸出比率は45%を超えていた。これが85年の円高以降年々輸出額が減少し、昨95年の輸出額は16億円、輸出比率4.3%と全く輸出競争力を失い、かつての輸出型産地の面影はない。

最近の生産額の減少は国内の不況による影響と輸出の減少によるところが大きい。輸出依存型産地が国内市場の開拓、製品の転換等の遅れが重なり、そ

表3 瀬戸産地陶磁器生産額の推移

単位 百万円

	生産額	比率	輸出向販売額	比率	国内向販売額	比率	輸出比率
1984	624.39	100.0	27300	100.0	33126	100.0	45.2
85	598.64	95.9	24141	88.4	32778	98.9	42.4
86	560.19	89.7	19401	71.1	34607	104.5	36.0
87	530.2	84.9	15937	85.4	35535	107.3	31.0
88	571.29	91.5	14443	52.9	39218	118.4	26.9
89	569.69	91.2	13047	47.8	41278	124.6	24.0
90	586.67	94.0	12862	47.1	43017	129.9	23.0
91	573.43	91.8	10808	39.6	43693	131.9	19.8
92	518.52	83.0	8214	30.1	41079	124.0	16.7
93	444.2	71.1	6106	22.4	38314	115.7	13.7
94	403.56	64.6	3612	13.2	36744	110.9	9.0
95	384.67	61.6	1663	6.1	36803	111.1	4.3



注1 愛知県陶磁器工業(協)調べ

注2 従業員4人未満は含まない

注3 比率は1984年を100とした指数である

1985年にはノベルティ(玩具・置物)が32.2%と全体の1/3を占め、次いで洋飲食器が18.7%と、この2品目で生産額の50.9%と過半数を超えていた。この双方が輸出を主とした製品であった。続いて電磁器16.2%、タイル13.8%で、これに工業理化学用品3.1%を加えると33.1%と丁度1/3が産業用資材である。「せともの」のイメージである和飲食器が13.7%となっている。すなわち、この当時の瀬戸産地は輸出向け1/2、産業用資材1/3、その他国内向け和飲食器等を1/6生産していたといえる。

しかし、1985年の円高以降、(1)で示したように輸出向けの落ち込みは激しく、1995年には、全体の生産額は85年の64.3%まで減少しており、品種別の生産構成比も大きく変化している。1995年には構成比の最も大きいのが電磁器で21.7%となっていた。

の影響を大きなものとしているといえる。

(2) 品種別生産動向

一般に陶磁器産地は、特定の品目を集中的に生産している所が多いが、瀬戸産地は置物・玩具(ノベルティ)をはじめ洋飲食器、和飲食品、電磁器、ファインセラミックスなど多種多様な製品を生産している総合的な陶磁器産地である。製品別生産額とその構成比を1985年、90年、95年と5年おきに比較したのが表4であり、85年と95年を比較したのが図2である。

表4 陶磁器の品種別生産額

単位 百万円

	1985年		1990年		1995年		1995/1985
	生産額	構成比	生産額	構成比	生産額	構成比	
タイル	8262	13.8	9907	16.9	2477	6.4	30.0
工業理化学品	1865	3.1	—	—	—	—	—
電磁器	9702	16.2	8725	14.9	8333	21.7	85.9
和飲食器	8189	13.7	7939	13.5	6498	16.9	79.4
洋飲食器	11188	18.7	7427	12.7	2861	7.4	25.6
台所料理用品	—	—	1237	2.1	948	2.5	—
玩具・置物(ノベルティ)	19286	32.2	13507	23.0	6891	17.9	35.7
ファインセラミックス	—	—	7420	12.6	8000	20.8	—
その他	1373	2.3	2506	4.3	2460	6.4	179.2
計	59865	100.0	58668	100.0	38468	100.0	64.3

注1 愛知県陶磁器工業(協)調べ

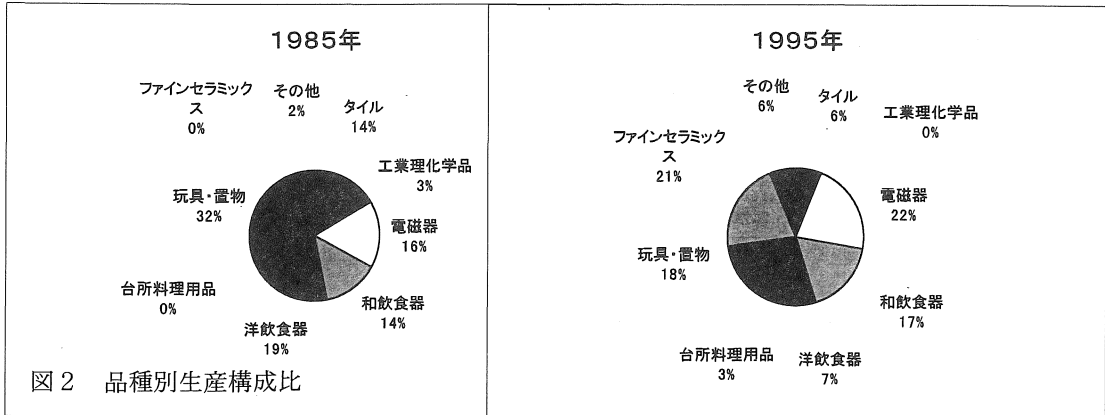


図2 品種別生産構成比

7%、次いで、86年に統計上に分類計上されたファインセラミックスが20.8%、これにタイルを加えると48.9%と産業用資材が約1/2を占めている。続いて、ノベルティ17.9%、和飲食器16.9%、洋飲食器7.4%の順となっているが、ノベルティ、洋飲食器とも輸出は壊滅的打撃を受け、国内市場を開拓してなんとか生き伸びている状況にある。

表5 品種別輸出割合 単位 %

	1985年	1990年	1995年
タイル	6.4	1.1	2.5
工業用理化学品	12.9	—	—
電磁器	1	0.3	0.5
和飲食器	1.8	0	0
洋飲食器	72.5	61.8	23.8
台所料理用品	—	65.2	22
玩具・置物	77.2	51.8	7.5
ファインセラミックス	—	0.2	0.5
その他	29.4	14.2	4.7
全体	42.4	23	4.3

注1 愛知県陶磁器工業（協）調べ

注2 一線部分は統計上分類されていない

(3) 企業数の推移

1995年の瀬戸産地の陶磁器産業の事業者数を愛知県陶磁器工業（協）の組合員数からみると和飲食器が257企業と最も多く、次いでノベルティ142企業、電磁器68企業など586企業となっている。1985年には691企業あったものが年々減少しており、特に1985年の円高による影響を大きく受けた時期に減少企業が多く、比較的好況といえた88年から91年にかけては安定していたものの、92年以降の不況によって再び廃業（組合員数の減少）は増加している。

これを品種別にみると、生産が堅調なファインセラミックス・電磁器等産業資材関係は安定しているが、減少の激しいのは海外マーケットを失い生産減の著しい洋飲食器とノベルティであり、85年に比べ95年には洋飲食器で77.8%、ノベルティで75.1%と約1/4の企業が廃業している。

表6 品種別企業数の推移

	1985	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
タイル	13	12	12	13	13	13	14	14	13	12	12
特殊品	46	47	47	47	47	48	46	45	46	45	44
電磁器	74	72	72	73	73	71	71	71	69	69	68
和飲食器	297	294	285	282	280	277	277	271	262	259	257
洋飲食器	54	52	51	50	50	49	46	46	46	46	42
玩具・置物(ノベルティ)	189	184	177	175	169	165	162	160	157	149	142
ファインセラミックス	18	20	19	19	20	20	21	20	20	21	21
計	691	681	663	659	652	643	637	627	613	601	586
前年より減少件数	14	10	18	4	7	9	6	10	14	12	15

注1 愛知県陶磁器工業（協）調べ

注2 原材料、上絵付メーカーを除く

(4) 全国における瀬戸産地の地位

瀬戸陶磁器産地の全国に占めるシェアを生産額で見ると表7のとおり1985年には6.5%であったが、1994年には全国の生産額の増加と瀬戸の減少もあって3.2%と半減している。

これを品種別にみると全国シェアが最も高いのがノベルティで25.2%を占めるが、1985年の39.4%に比べると大きくシェアを落としている。瀬戸の主要製品のひとつである和飲食器も他産地が生産額をのばしている中で瀬戸は減少し、全国シェアを6.8%から5.5%へ落としている。他産地との競合に打ち勝ち生産額を伸ばさないと瀬戸焼きの存在価値が希薄になる恐れがある。洋飲食器も同様である。電磁器についてはその需要は産業界の設備投資動向に左右されるが、全国シェアが低下していることは問題である。

瀬戸産地の陶磁器業界に占める地位は低下の一途を辿っているように見え、抜本的な対策が必要といえよう。

5. 主要製品について検討

瀬戸産地不振の実情とその要因につきノベルティ、洋飲食器、和飲食器の3主要製品について考察する。

(1) ノベルティ (玩具・置物)

瀬戸産地においてノベルティの生産が盛んになったのは、非常に粘性の高い木節粘土や蛙目粘土を産したことで、技術的にはノベルティの大量生産に適した鑄込み技術が発達し、これを支える石膏型メーカー、原型師など優れた周辺技術が発達したことによる。

ノベルティはシェアが下がってきたとはいえ全国の25.2%(94年)を生産する全国一の産地であり、産地内の生産額においても17.9%(95年)を占め未だ主要製品の一角を担っている。

表7 全国生産額に占める瀬戸産地の割合

	瀬戸産地の生産額		全国生産額		瀬戸産地のシェア	
	1985年	1994年	1985年	1994年	1985年	1994年
タイル	4201	24	174556	226864	2.4	0.0
工業用理科学用品	1814	—	10016	25430	18.1	0.0
電磁器	10309	7446	238306	312530	4.3	2.4
和飲食器	7871	6837	115394	123635	6.8	5.5
洋飲食器	7664	3964	100346	87141	7.6	4.5
台所・料理用品	x	965	5835	7399	—	13.0
玩具・置物(ノベルティ)	19358	8201	49109	32579	39.4	25.2
その他	5703	5672	187758	219358	3.0	2.6
計	56920	33109	881320	1034936	6.5	3.2

注1 通産商工業統計表及び愛知県工業統計年鑑による

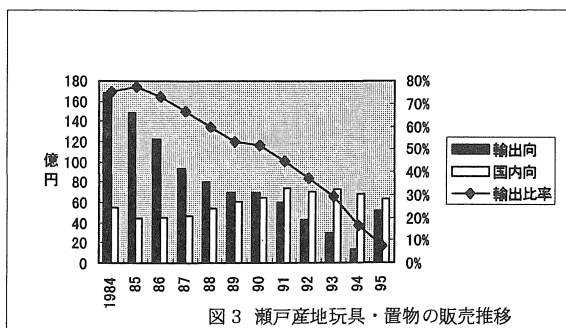
注2 ファインセラミックスは含まない

表8 瀬戸産地玩具・置物の販売推移

単位 百万円

	販売計		輸出向		国内向		輸出比率
	全額	指数	全額	指数	全額	指数	
1984	22322	100.0	16800	100.0	5522	100.0	75.3
85	19258	86.3	14864	88.5	4394	79.6	77.2
86	16796	75.2	12273	73.1	4523	81.9	73.1
87	14034	62.9	9391	55.9	4643	84.1	66.9
88	13389	60.0	8031	47.8	5358	97.0	60.0
89	13168	59.0	7005	41.7	6163	111.6	53.2
90	13461	60.3	6979	41.5	6482	117.4	51.8
91	13467	60.3	6057	36.1	7410	134.2	45.0
92	11387	51.0	4281	25.5	7106	128.7	37.6
93	10328	46.3	3034	18.1	7294	132.1	29.4
94	8203	36.7	1359	8.9	6844	123.9	16.6
95	6890	30.9	520	3.1	6370	115.3	7.5

注1 愛知県陶磁器工業(協)調べ



1985年の円高以前、例えば84年には年間223億円を生産して内168億円を輸出し、輸出比率は75.3%に達していた。また、当時は瀬戸産地が生産する陶磁器の35.7%と品目別生産額の第1位であり、瀬戸産地輸出額の61.5%に達していた。

これが、85年の円高以降輸出競争力が低下し年々輸出は落ち込み、10年後の95年には輸出額5億円と殆ど輸出は皆無に等しくなっている。一方、内地向けをみると国内向け市場開拓、国内向け商品開発の努力の甲斐があつて、91年頃までは上昇基調にあつたが、92年以降国内景気の影響かやや低迷している。いづれにしても輸出の減少はあまりにも大きく急激で、ノベルティの生産は最盛期の30.9%と1/3になっている。

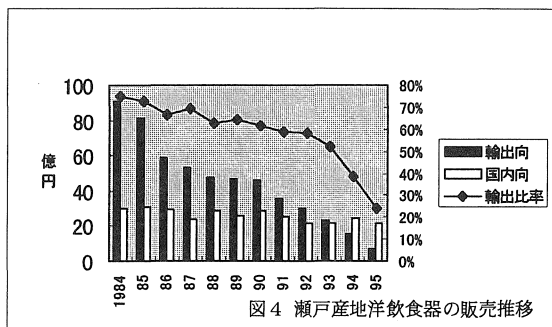
輸出については、海外市場が台湾等NIEES諸国にとって変られており、産地内においても構造変化が生じていて、かりに為替が円安となつても回復は難しいと考えられる。また、逆に日本メーカーが海外生産を進め、製品を国内へ持ち込む傾向が一層強まることが予想される。

このため、国内市場に対応した商品開発と流通

チャネルの開拓に一層の努力が必要である。

(2) 洋飲食器

洋飲食器は、かつてはノベルティに次ぐ第2位の生産額をあげ瀬戸を代表する製品であつた。1984年には121億円を生産し、内80億円を輸出し、輸出比率は75.0%と、ノベルティ同様3/4を輸出していた。ノベルティと合わせると生産額は344億円と瀬戸産地の55%を占め、輸出額は258億円と瀬戸の輸出型産地を支えていた。



全国的にみると瀬戸の洋飲食器は85年には全国の7.6%の生産額が94年には4.5%とシェアを低下している。輸出と国内に分けてみると、輸出は年々落ち込み10年後の95年には6億8千万円と最盛期の7.5%程度となっている。一方、国内向けをみると85年をピークとして増減を繰り返しているが、95年には21億円と85年の71.3%にすぎない。輸出の減少はあまりにも大きく、又国内市場の開拓も遅れ、瀬戸産地の洋飲食器の生産は84年の23.6%に落ち込んでいる。為替相場の円高、日本の高コスト構造を考えたとき輸出の回

表9 瀬戸産地洋飲食器の販売推移

単位 百万円

年	販売計		輸出向		国内向		輸出比率
	全額	比率	全額	比率	全額	比率	
1984	12110	100	9083	100	3027	100	75
85	11140	92	8082	89	3058	101	72.5
86	8772	72.4	5847	64.4	2925	96.6	66.7
87	7693	63.5	5320	58.6	2373	78.4	69.2
88	7593	62.7	4760	52.4	2833	93.6	62.7
89	7274	60.1	4697	51.7	2577	85.1	64.6
90	7460	61.6	4608	50.7	2852	94.2	61.8
91	6044	49.9	3536	38.9	2508	82.9	58.5
92	5193	42.9	3014	33.2	2178	72	58
93	4448	36.7	2305	25.4	2143	70.8	51.8
94	3964	32.7	1540	17	2424	80.1	38.8
95	2861	23.6	681	7.5	2179	72	23.8

注1 愛知県陶磁器工業(協)調べ

復は望みにくく、いかに国内市場を開拓するかであるが、他産地及び大手洋飲食器メーカーとの競合に打ち勝つためには相当の努力を要するものと思われる。

(3) 和飲食器

和飲食器は伝統ある瀬戸産地が長年に亘り作り続けてきた製品であり、今でも瀬戸の主要製品であることは揺らいでいない。和飲食器の瀬戸産地内における地位及び全国の地位をみると表10のとおりである。

表10 和飲食器の地位

単位 百万円

	瀬戸の生産			全国の生産			瀬戸のシェア
	生産額	指数	産地内シェア	生産額	指数		
85	7871	100	13.7	115394	100		6.8
86	7413	94.2	14.6	113890	98.7		6.5
87	7635	97	16.8	114656	99.4		6.7
88	7539	95.8	15.2	114633	99.3		6.6
89	7558	96	13.5	121352	105		6.2
90	7952	101	13.5	129176	112		6.2
91	7739	98.3	13.5	129555	112		6
92	7184	91.3	13.7	125886	109		5.7
93	7130	90.6	16.3	115718	100		6.2
94	6837	86.9	17.3	123635	107		5.5

注1 通産省工業統計表及び愛知県工業統計年鑑による

注2 産地内のシェアは愛知県陶磁器工業(協)調べ

瀬戸産地における和飲食器の生産は最近若干下り気味なのが気になるものの年間70億円台を維持し

てきた。ただ全国の生産がわずかではあるが伸びているのに比べ瀬戸の生産は低迷していると云える。このため、全国シェアは6%台から5%台へ落ち込みつつあり94年には5.5%まで低下した。和飲食器の主要産地としては、瀬戸をはじめ美濃・有田・波佐見・清水・萬古・九谷の七産地があげられるが、萬古産地は土鍋など特殊な和飲食器を得意としていることから他の6産地との競合は弱いと推察される。また、清水・九谷については高級品ではあるがそのシェアはさほど大きくなく、和飲食器の大きな競合は製品のグレード、生産方法、原料(陶土・陶石)などの点からみて陶器で大衆品の瀬戸・美濃対磁器で高級品の有田・波佐見の関係であり、かつ、その中の瀬戸対美濃、有田対波佐見の競合である。

まず、瀬戸・美濃対有田・波佐見をみると表11に見るとおり瀬戸・美濃グループが全国シェア87年の46.1%を最高に順次低下し93年には40.7%となっている。ただ94年には急反発し47.5%となっているが単年度だけの変化ではその傾向が今後続くか不明であり、原因をよく調べる必要がある。また、有田・波佐見グループでは87年の33.3%を底に年々上昇し93年には36.6%まで達したが94年には32.4%に低下している。94年の異常とも見られる数値を除けば最近数年は若干有田・波佐見グループが有利かと判断される。

表11 主要産地間シェア比較

単位 百万円

	瀬戸・美濃							有田・波佐見							
	瀬戸			美濃				シェア	有田			波佐見			
	生産額	比率	シェア	生産額	比率	シェア	生産額		比率	シェア	生産額	比率	シェア	シェア	
1985	7871	100	6.8	43998	100	38.1	44.9	20059	100	17.4	20251	100	17.5	34.9	
86	7413	94.2	6.5	43815	99.6	38.5	45	20708	103.2	18.2	19929	98.7	17.5	35.7	
87	7635	97	6.7	45230	102.8	39.4	46.1	21718	108.3	18.9	16483	81.4	14.4	33.3	
88	7539	95.8	6.6	41365	94	36.1	42.7	23835	118.8	20.8	17235	85.1	15	35.8	
89	7558	96	6.2	44296	100.7	36.5	42.7	26005	129.6	21.4	17598	86.9	14.5	35.9	
90	7952	101	6.2	47116	107.1	36.5	42.7	28304	141.1	21.9	18115	89.5	14	35.9	
91	7739	98.3	6	46981	106.8	36.3	42.3	29180	145.5	22.5	17693	87.4	13.7	36.2	
92	7184	91.3	5.7	45863	104.2	36.4	42.1	27696	138.1	22	17915	88.5	14.2	36.2	
93	7130	90.6	6.2	39921	90.7	34.5	40.7	25119	125.2	21.7	17278	85.3	14.9	36.6	
94	6837	86.9	5.5	51970	118.1	42	47.5	24005	119.7	19.4	16119	79.6	13	32.4	

注1 通産省工業統計表を用い、美濃は岐阜県、有田は佐賀県、波佐見は長崎県の数値を準用した。

瀬戸については愛知県工業統計年鑑の瀬戸地域即ち瀬戸市と尾張旭市の合計を用いた。

注2 シェアは1985年を100とした指数である。

では、それぞれの中を見るとどうか、まず瀬戸・美濃グループにおいては瀬戸がやや減少傾向、美濃が横這い。また、有田・波佐見グループにおいては明らかに有田のシェア拡大と波佐見の低迷が読みとれる。いずれにせよこの4産地で全国の約80%のシェアを占めており、瀬戸としては他の3産地を良く研究し、競争力を強化しなければならない。瀬戸産地は「せともの」という陶磁器の俗称が示すイメージを脱皮する商品戦略をとれなかったこと、あるいはその対応の遅れから他産地の台頭を許し、相対的なシェア低下を引きおこしてきたといえよう。さらに、特に美濃に比べ企業の零細性、複雑な生産体制が設備投資の立ち遅れを生じ、生産面の合理化・近代化をはばんだ結果、コスト面・商品開発面で競争力を低下させてきたといえる。

現在、消費者は感性にあった質の高い商品を探求しているといわれており、業務用・ギフト用・家庭用を問わず、デザインを重視した消費者のニーズにあった商品の開発・供給が期待される。

6. 瀬戸産地の抱える問題点

以上述べてきたとおり瀬戸産地は厳しい状況におかれており、また、多くの問題を抱えている。

(1) 輸出依存型製品の低迷

現在の瀬戸産地の低迷は、ノベルティ、洋飲食器といった輸出型製品に大きく依存し、これが急激な円高という影響を受けて輸出が年々減少し、もはや殆んど輸出が困難な状況になっていること並びに国内市場の開拓がなかなか進まず、またこれに変わる新しい分野が育たなかったことにある。

産業が高度に発達し、人件費が世界の1、2といわれる高さにある日本において労働集約的なノベルティのような産業は、特別な高級品を除いては国内での生産は困難と思われる。

(2) デザイン開発力、商品開発力の弱さ

瀬戸産地の企業は受注生産型企業が多く、商社あるいはバイヤーから図面或いはサンプルを示されて生産してきたところが多い。従って、自社における市場ニーズの把握、デザイン開発力、新商品開発力などの乏しい企業が多い。確かに受注生産の場合

は、スケッチが少ないが、自主性ある企業経営は難しく、収益力にも欠けることになりかねない。

(3) 企業の零細過多性

瀬戸産地の企業数の圧倒的多数を占める和飲食器、ノベルティのメーカーは非常に小規模零細企業が多い。このため設備投資が困難で生産面の合理化が進まず、品質・コスト面での競争力に欠ける。また、小規模企業が多いが故に一寸量がまとまると受注できず、みすみす他産地へ発注されることがある。

(4) 技術開発力の低さ

現在、瀬戸産地を支えている太い柱は電磁器・ファインセラミックス等の産業用資材である。特にファインセラミックスは原料・加工方法・用途など激しい開発競争の中にある。技術力の向上なしには他の製品同様与えられたものを作るといった受注生産・下請加工になる恐れもある。技術力の向上なしには新製品の受注、新分野進出も難しいことを知るべきである。

(5) 後継者問題

中小企業の経営は経営者次第ともいえ、企業の活力は後継者の有無で大きく変わる。後継者の無い企業では投資意欲もなく経営は沈滞してしまう。産地も同じであり、若く逞しい後継者が多勢出て活力溢れる産地を形成したい。

7. おわりに

今回は産地の現状を深く掘り下げ、実態を明らかにすることに重点を置いた。瀬戸産地は、常に新しい技術に挑み新しい製品を産地のものとしてきた。陶磁器産地としてはめづらしく食器・玩具から碍子・ファインセラミックスまで何でも生産できる技術を持った産地であり、常に新しい分野に挑戦してきた歴史を持っている。これを生かし産地の発展を期して欲しい。

前項6で述べた問題点の裏返し改善策であるが、その具体的な進め方等については次回報告することとしたい。

参考文献

- 愛知県；陶磁器製飲食器需給状況調査報告書
(和飲食器) 1993年2月
- 愛知県；陶磁器製飲食器需給状況調査報告書
(洋飲食器) 1994年3月
- 愛知県；瀬戸地域陶磁器産業創造の発展調査
報告書 1993年3月
- 井上博進；地方都市地場産業の構造・問題点
及び対策（瀬戸陶磁器産地）
中小企業大学校東京校
(受理 平成9年3月21日)